

2008年2月

一般演題

625(S-345)

P2-33 細胞診検査において核内細胞質封入体が Lobular endocervical glandular hyperplasia に高率に認められる

山梨大

端 晶彦, 奈良政敏, 大森真紀子, 平田修司, 星 和彦

【目的】子宮頸部胃型形質発現病変として悪性腺腫, 分葉状頸管腺過形成(Lobular endocervical glandular hyperplasia, LEGH)などが注目されている。LEGHに粘液性腺癌が合併する例が報告されているが, LEGHが前癌病変的性格を持つかは結論がでていない。臨床で取り扱う胃型形質発現病変としてはLEGHが多いと考えられ, LEGH症例の管理は重要である。LEGHにおける術前細胞診所見の特徴を検討した。**【方法】**当院及び関連病院で経験した症例を用いた。LEGH症例23例, LEGHから発生したと推定される腺癌を合併した5症例, 悪性腺腫4例, 対象として通常の内頸部型粘液性腺癌10例の術前細胞診所見を検討した。**【成績】**LEGH症例(23例)は, 細胞異型はほとんど認めず, 細胞集塊は平面的配列を示し, 黄色調粘液を有する細胞集塊が高頻度に出現していた(20/23, 87%)。明らかな核内細胞質封入体(INCI)の出現を17例(17/23, 74%)に認めた。LEGHに腺癌を合併した5例は前述のLEGH特有の細胞(黄色調粘液5/5, 100%, INCI5/5, 100%)に混じって腺癌を推定できる異型細胞が全例に認められた。腺癌を推定できる細胞にはINCIは認めなかつた。悪性腺腫では細胞集塊に立体感があり, 核の重積性, 核小体の大型化が見られ, 黄色調からオレンジ調の色調を呈する豊富な粘液を持つ細胞集団を認めた。INCIは確認できなかつた。通常の内頸部型粘液性腺癌では, 腺癌と診断できる細胞集塊が認められたが, INCIは確認できなかつた。**【結論】**INCIはLEGHにのみ高頻度に出現していた。INCIはLEGHに特徴的な所見である可能性がある。LEGHに腺癌を合併する症例ではLEGH特有の細胞に混じって腺癌が示唆される細胞の出現に注意が必要である。

P2-34 5年以上経過観察をおこなったCIN症例の検討

産業医大

ト部理恵, 松浦祐介, 北島光泰, 川越俊典, 土岐尚之, 蜂須賀徹, 柏村正道

【目的】CIN症例の取り扱いは施設によって方針が異なり, 特にCIN1/2の症例の経過観察の間隔, 治療を行うか否か, また治療時期についてのコンセンサスは得られていない。5年以上長期経過観察を行ったCIN症例における転帰および, その因子についてコルポスコピー所見を中心に検討した。**【方法】**1984年以降, CINと診断され, 5年以上経過観察できた161症例についてその転帰を消失・存続・進行に分け検討した。6ヶ月ごとにコルポスコピー, 細胞診を行い増悪が疑われた場合に組織診を施行した。2年間以上コルポスコピー, 細胞診ともに陰性の場合を消失と定義した。CIN1では2段階以上, CIN2, 3では浸潤癌となった場合を進行と定義した。初診時のコルポスコピー所見は診療録を参照し異常所見の広がりと種類について検討した。**【成績】**消失はCIN1で47/81(58%), CIN2で17/52(32%), CIN3で14/28(50%)に認められた。進行はCIN1で6%, CIN2で10%, CIN3で0%であった。初診時にCIN2と診断しその後, 浸潤癌へ進行した症例が5例みられた。初診時35歳未満の若年例のCIN1では消失が多い傾向が認められた。コルポスコピー所見は, 痘変が1/2周未満であった症例の割合がCIN1:65%, CIN2:36%, CIN3:35%, 全周性病変はCIN1:5%, CIN2:8%, CIN3:29%に認められた。異常所見が2種類以上みられた割合はCIN1:26%, CIN2:40%, CIN3:61%であった。CIN2症例中, 痘変が1/2周未満で存続・進行した例は14/35(40%)であり, 2種類以上の異常所見がみられた症例で存続・進行は15/35(43%)であった。**【結論】**初診時のコルポスコピー所見と転帰との関連は見いだせず, CIN2の症例であっても浸潤癌へ進行する例もあるため慎重な対応が求められる。

13
一般
(日)
演題**P2-35 子宮頸癌検診における年次別細胞診陽性率および採取器具の違いによる検討**

豊見城中央病院

首里英治, 茂木絵美, 安座間誠, 上地秀昭, 前濱俊之

【目的】子宮頸癌検診の細胞診陽性率を年次別・年代別に比較・検討した。また採取器具の違いによる結果も併せて解析した。**【方法】**平成13年4月～平成19年3月まで当院健康管理センターを受診した人の細胞診陽性率, 転帰について検討した。採取器具は, 平成13年4月～平成18年3月は綿棒を使用し, 平成18年4月～平成19年3月はサイトブラシを導入しており, 両期間において比較・検討した。**【成績】**平成13年4月～平成19年3月より当院健康管理センターを受診した患者総数は18,254人であり, その中で細胞診陽性者は169人(0.9%)であった。平成13～17年度までの平均受診者は2,982人, 平均細胞診陽性者は19人(0.6%)であったが, 平成18年度は受診者3,345人, 細胞診陽性者75人(2.2%)と細胞診陽性者数は有意に上昇した($p<0.01$)。年代別では, 30代, 40代で有意に上昇していた($p<0.05$)。平成18年度の細胞診陽性者75人の転帰は以下の通りであった。組織診で異常なし34人, 軽度異形成16人, 中等度異形成6人, 高度異形成11人, 上皮内癌4人, 詳細不明4人であった。**【結論】**サイトブラシを導入した平成18年度は, 細胞診陽性率が有意に高い結果となった。サイトブラシによる組織の採取では, 細胞を多量に採取でき, 頸管内の評価に有用と思われた。また若年者に細胞診陽性率が増加しており, その転帰では軽度異形成や高度異形成が著明に増加していた。